

穴沢 越夫（あなざわ・たけお）

1、プロフィール

歌人。尾上柴舟の「水甕」同人として活躍。美術の教員として教鞭をとる傍ら、弘中短歌会（後に甲虫短歌会と改称）の中心的指導者となり、後に「弘前短歌会雑誌」の同人として意欲的に活動する。

<生没>

1899(明治 32)年3月9日 ~ 1946(昭和 21)年2月 25 日

<代表作>

『穴沢越夫遺歌集 ふるさとの月』

<青森との関わり>

下北郡大畑村(現大畑町)に生まれる。旧制弘前中、浪打高等小、佐井村矢越小等で教鞭をとる。佐井村で没。

2、作家解説

明治 32 年3月9日、下北郡大畑村に穴沢直哉・たかの二男として生まれる。大正 13 年日本美術学校を卒業し、14 年に青森県立弘前中学校に赴任する。生徒との接触は課外の短歌の世界の方が深く、すでに尾上柴舟の「水甕」に同人として活躍していた関係もあり、生徒の主唱で結成された「弘中短歌会」の指導者として会の中心となる。

昭和3年、25 回までの詠草を集め『甲虫歌会詠草集』を発行する。「歌集の初めに」には「後れて来る者の為に、この標柱を路傍に残して・・・」と記し、出詠者を含む会員すべての名を揚げ実直な人柄を示している。

5年3月の「校友会報(32号)」に12首を寄せ、同月の文芸総合誌「座標」に「前号短歌概評」を書き、5月創刊の「弘前短歌会雑誌」に同人として毎号十数首を出詠し、11 月には郷土誌「むつ」に「陸奥郷土会の浮世絵版画展を見て」を発表するなど活動が顕著であった。「弘前短歌会雑誌」2号に載せたエッセイ「歌集装

幀小論」には、「10年後、短歌で近代的意匠の装幀が実現し、それは時代精神に敏感な洋画家の参加を待ってのみ促進される」と主張している。

6年に体調を崩して教員を退職した後、病氣療養のため上京、一時画道に精進し、生活難を経験、妻との協議離婚等を経て、郷里の大畑村に帰り吏員となる。後に再び教壇に立ち(青森市立浪打高等小学校、私立堤橋高等女学校、佐井村立矢越小学校)画業に専念するが、昭和21年2月25日、急性肺炎で不遇の生涯を終える。享年48。

3、資料紹介

○『穴沢尠夫遺歌集 ふるさとの月』

図書

1995(平成7)年4月29日

176mm×129mm

穴沢尠夫の大正2年から昭和8年までの短歌を824首収めた遺歌集。昭和8年の「近詠」にはじまり、年を溯って大正2年に至る構成になっている。旧制弘前中学時代に穴沢から短歌の指導を受けた小山内時雄が編集し、郷土作家研究会から発行された。